

■「旧東川駅跡再開発プロジェクト基本構想」について

1. はじめに

「旧東川駅跡再開発プロジェクト基本構想」は、従来の施設整備に主眼をおいた計画とは異なり、東川町の将来のまちづくりを構想し、本プロジェクトの位置付けを明示することを目的としています。

2. 地域の抱える課題を解決するプロジェクト P 2～3

「旧東川駅跡再開発プロジェクト」は、東川町の様々な地域資源や文化財、国内外とのネットワークを活用し、将来のまちづくりに向けた課題解決を図る基盤となる場所として旧東川駅跡の活用を図るものと位置づけています。

本プロジェクトの実現に向け、開設後の日常的な利用など、町民が主体的に活用できる場とすること、町の文化資源や文化財を活用することで新たな文化を創出していく場とすること、東川町が多様な主体とのかかわりの中で、まちづくりの課題解決につながる新たな発見や経済活動を生み出していく場とすることを想定しています。

令和5年度までは、本プロジェクトを「KAGU デザインミュージアム」と称していましたが、本プロジェクトはデザインに関する展示施設にとどまらず、まちの様々な資源を活用し、旧東川駅跡一帯を起点として幅広くまちづくりの課題の解決を目指すものであることから、事業の名称について「旧東川駅跡再開発プロジェクト」を新たに用いることとしました。

尚、本プロジェクトは一貫して、「東川町新まちづくり計画 2024」で示している「『対話と参加』によるまちづくり」を基本姿勢として進めています。

3. これまでの検討経過 P 4～P 5

これまでに、懇談会、住民説明会・タウンミーティング、有識者会議、東京・上士幌視察、隈研吾建築都市設計事務所、Atelier Tsuyoshi Tane Architects によるプラン提示など、複数のプロセスを経て検討を重ねてきております。

7月にはタウンミーティング、11月1日、4月19日には住民説明会を開催したほか、令和8年3月15日には東町2丁目町内会に対する説明会、議会に対しても必要に応じて、構想策定の進捗と考え方を共有しています。

また、議論の具体化と実現可能性の検証を目的に、先進地視察を実施しており、1月13日・14日には、商工会、農協、観光協会、木工会、議員、町職員など計31名で東京都内を訪問し、建築倉庫や「織田コレクション ハンス・ウェグナー展」等を視察しました。展示手法、空間構成、物販・イベント連携、さらには民間主体の運営モデルについて検証を行っております。

1月23日には、懇談会のメンバーを中心に25名で上士幌町を視察し、(株)生涯活躍のまちかみしほろ、(株)Karch を訪問しました。第3セクターの役割分担、行政との関係性、事業採算構造、持続可能な運営体制の構築プロセスと事業内容・成果・課題などについて確認しております。

これら一連の取組は、単なる施設整備の検討ではなく、文化資源の活用、空間設計の具体化、運営主体のあり方、官民連携の可能性を含め、基本構想の実効性を高めるための検証プ

ロセスと位置づけております。

3月2日には設計会社によるプラン説明会を懇談会、有識者を対象に実施しました。

町内の関係団体より推薦をいただいた29名の委員により構成する懇談会においては、7回の懇談会を開催し、町の課題整理、資源の再評価、ねらい・基本理念・導入機能、機能配置について検討を行い、町が整理した基本構想中間報告について検証を行っていただきました。

懇談会では、「何のための施設か」という目的の明確化が重視され、町民の暮らしに根ざし、学びや交流を生み出す公共的な場とする方向性が共有されています。特に、観光機能への偏りに対する懸念が多く示され、日常的に利用される拠点としての地域交流機能の必要性が確認されています。

また、展示施設においては、従来型の展示にとどまらず、体験・参加・学びを伴う「使う施設」への転換が求められ、織田コレクションについても保存に加え、活用や発信のあり方が重要な論点となっております。また、子どもや若者を含め、多様な世代が関わり、日常的に利用できる機能への期待が示されました。

空間構成については、レンガ倉庫等の既存資源の活用を基本としつつ、敷地単体で完結するのではなく、中心市街地や既存施設との連携による回遊性の確保など、「町全体で価値を高める」ネットワーク型の視点が求められました。

その他、整備費・運営費の両面における持続可能性の確保や、段階的整備・優先順位付けの必要性が示されています。

4. 既存公共施設 P 6～P 7

町内の既存公共施設について、行政・地域コミュニティ拠点、文化・学びの拠点、観光拠点、産業拠点として、一定の役割を果たしていると評価される施設も一部あるものの、町全体としての回遊等を促す視点においては課題があるものと考えています。

5. 旭川電気軌道東川線・東川駅跡地について P 8～P 9

検討してきた機能を実現する場として、構想策定に先立ち、旧東川駅跡地に現存する10棟の倉庫の活用検討を行うべく構造調査を実施しました。建物外観の維持を図りつつ利用の有無を含め調査・検証を進めてきましたが、対象建物群は、歴史的建造物という位置付けにおいては、時代的には新しいという指摘もありますが、駅舎が現存しない状況では東川町の発展の歴史をとどめる重要な建物群であると考えられます。

その上で、一部の建物については、構造上の課題等を踏まえ撤去するものとし、存置する建物については、必要な構造補強等を実施した上で活用することを前提として整理しております。

6. 本構想の政策的・計画的な位置づけ P11～P15

本プロジェクトは、以下の上位計画・関連計画と密接に連動しています。これらを個別施策ではなく、地域の直面する課題を横断的に解決する基盤として位置づけており、「分野横断型プロジェクト」である点を重要視しております。

(1)『新まちづくり計画2024』（令和5（2023）年度策定）との関係

本町が直面する以下の7つの課題への対応を前提としています。

- ① 地域コミュニティの持続
- ② 産業振興と地域内外の協働・共創
- ③ 子ども・若者の定着
- ④ 高齢者を含めた生活の安心
- ⑤ 交通体系の再構築
- ⑥ 環境・ゼロカーボン対応
- ⑦ 観光と地域資源活用

(2) 『ひがしかわ価値創造計画』令和4（2022）年度策定）との関係

中心市街地の役割として掲げる「暮らしの魅力の発信」、「人と地域をつなぐ拠点」を具体化する中核施策と位置づけています。

(3) 文化政策・産業政策との統合

本構想は以下を統合的に扱う点に特徴があります。

- ① 文化政策（織田コレクション等）
- ② 産業政策（家具・農業・観光）
- ③ 教育・人材育成
- ④ コミュニティ政策

7. 基本的な方向性 P17

本構想における基本的な考え方は、「町全体がデザインミュージアム」であります。

これは、従来のように施設単体で機能を完結させるのではなく、町内に点在する行政・地域コミュニティ拠点、文化・学びの拠点、観光拠点、産業拠点、自然環境、暮らしの場などを相互に結びつけ、旧東川駅跡を起点（ハブ）としてそれらを回遊し体験することにより、東川町の価値を総合的に感じられる構造を形成するものです。

さらに、その体験を通じて、新たな関係の創出、学びの深化、活動の発展へとつながる「価値の循環」のエコシステムを生み出すことを目指すため、以下の構造により整理します。

(1) 面（町全体）

町全体を一つのミュージアムと捉え、既存施設、産業、自然、暮らし、文化資源等を価値創出の基盤として位置づけます。

(2) 線（回遊）

各施設や資源をつなぐ回遊動線を構築し、テーマ性やストーリー性を持った体験の連続性を創出します。また、主動線に加え、副次的な回遊ルートを形成することで、滞在の深化と新たな発見を促します。

(3) 点（旧東川駅跡）

旧東川駅跡は、町全体の回遊の起点となる拠点として位置づけます。そのため、単なる導入機能にとどまらず、人・情報・活動が交差し、関係性を生み、価値創出へとつなげるハブ機能を担う拠点とします。また、既存公共施設との接続により、町全体の価値を可視化し、回遊を促進する役割を担います。

(4) 空間

本施設は、交流・創造・学びが相互に作用し、新たな関係の創出、活動の発展、価値の

生成が連続的に生まれる空間とし、集客機能のみを目的とするものではなく、町民の居場所として日常利用を基本としつつ、来訪者との接点を生み出す「日常と交流が両立する拠点」として位置づけます。

8. 基本理念・導入機能 P18

基本理念について、本プロジェクトでは、「東川の魅力に触れ、学び、人とつながりながら、東川らしい豊かな暮らしを育む拠点」として位置づけております。東川町には、豊かな自然環境、家具・木工をはじめとする産業、そして長年にわたり培われてきた文化や暮らしがあります。

○本施設の4つの方針

本施設は、これらの資源を単に展示するのではなく、その背景にある歴史や価値を学び、体験し、次につなげていく場として整備するものであり、4つの方針を掲げました。

一つ目は、「東川の暮らしを支えてきた生活・産業・文化の歩みを学べる場」です。過去から現在に至る東川の営みを知ることで、地域の価値を再認識し、次の時代へとつなげていくことを目的としております。

二つ目は、「多様な人々が地域の活動に参加し、人と人がつながる場」です。町民はもとより、町外から訪れる人も含め、多様な主体が関わり合うことで、新たな交流や活動が生まれることを想定しております。

三つ目は、「世界と共に、新しい価値を探究し発信する場」です。東川の魅力を外に伝えるとともに、外からの知見や人材を受け入れることで、新たな文化や価値の創出につなげていくことを目指しております。

四つ目は、「町民にとって日常的でかけがえのない居場所」であることです。本施設は、特別な目的がなくても立ち寄ることができる、日常の延長にある公共空間として、町民の暮らしに寄り添う存在であることを重視しております。

このように、本施設は、「学び」「交流」「発信」「日常」といった要素が相互に関わりながら、人と価値が循環し続ける拠点となることを目指しております。

○本施設に導入する4つの機能

本施設に導入する機能については、4機能として整理しています。

一点目は、文化に資する機能です。

東川の暮らしの源流である、生活・産業・文化の歴史等を知ることができる機能とともに、織田コレクションを核として、国内外との交流を促進し、新たな文化価値の創出につなげていく機能です。

二点目は、学びに資する機能です。

町内外の多様な主体との協働を通じて、体験や活動、学び合いの機会を創出・支援し、「学ぶ」「働く」「暮らす」といった営みを一体的に捉えながら、定住や新たな地域活動の創出につなげていく機能です。

三点目は、地域に社会的・経済的価値を生み出す機能です。

東川の産業の魅力を広く発信するとともに、多様な主体との連携により、新たな価値を創出していく機能です。

四点目は、コミュニティづくりに資する機能です。

まちづくり団体の活動や取組を広く発信する機能や、町民が日常的に集い、憩い、交流し、イベント等を行うことができる居場所機能を位置づけています。

これらの機能は、それぞれ独立するものではなく、相互に連携しながら、人の流れや活動、価値の循環を生み出す構造として整理し、具体的な機能については、展示・収蔵・交流・居場所等を要素として見込んでいます。

9. 町全体がデザインミュージアム P19～P20

本プロジェクトでは、「町全体がデザインミュージアム」という考え方のもと、町全体をウォークアブルな学びと体験の場として位置づけます。

この考え方を踏まえ、旧東川駅跡に導入する機能については、まず町内の既存公共施設が担う機能や役割を検証し、それらとの連携・補完を基本とします。その上で、既存施設のみで対応可能な機能と、新たに整備・充実すべき機能を整理し、まち全体としての機能の深化と相乗効果の創出を図ることを基本方針としています。

既存公共施設が担っている機能については、引き続き各施設の役割として位置づけます。一方、旧東川駅跡は、それらの施設や機能をつなぎ、補完するとともに、一体的な運営や連携による相乗効果を生み出す拠点として位置づけています。

また、回遊については、人の移動だけでなく、交通・情報・プログラムを組み合わせた実効性のある仕組みとして捉え、その具体的な内容は基本計画において検討・具体化する予定です。

10. 機能配置の考え方 P21～P22

旧東川駅跡は、文化創造エリアと地域交流エリアという2つのエリアで構成することを見込んでいます。

文化創造エリアは、文化資源の保存・研究・活用・発信を担い、町と世界をつなぐ役割を担い、織田コレクションをはじめとする文化資源の収蔵、展示、価値発信を機能としています。

一方、地域交流エリアは、町民や来訪者が集い、活動・交流するなど、日常的に利用できる場としての役割を持つエリアです。町民の日常的な利用や活動を支える交流、居場所、情報発信、イベント、町の価値を創出するコミュニティビジネス、簡易な飲食や物販、路面電車の展示などを機能としています。

旧東川駅跡は、これら2つのエリアの機能が交わることで、世界と共に新しい価値を探求し発信する構造とし、文化と日常、町内と町外、学びと活動が交差することで、本施設の価値が最大化されることを目指します。

理念、機能、空間構成を一体として整理し計画を進めることで、旧東川駅跡が「東川の魅力に触れ、学び、人とつながりながら東川らしい豊かな暮らしを育む拠点」として位置づけられると想定しています。

○空間構成(案)

具体的な空間構成として、ストレージ（約 2,500 m²）、展示・ロビー・オフィス（約 600

m²)、パブリックスペース (約 700 m²)、多目的ホール (約 300 m²)、屋外広場といった構成を見込んでいます。

特にストレージについては、織田コレクションを中心とした収蔵機能として位置づけており、公開型収蔵や既存拠点における展示との連携も視野に入れております。一方、パブリックスペースや屋外広場は、町民の日常的な利用を支える町内に点在する居場所機能の中核として位置付けます。

既存倉庫の活用について、レンガ倉庫、石造倉庫の4棟については、原則として保存・活用とし、不足する機能については新築で補完することで、歴史的価値と機能の両立を図ることとしております。

その他、プラットフォームや記念碑の活用、交通動線の検討、道路の交通制限の検討、収蔵対象文化財の整理なども必要な事項として見込んでいます。特に収蔵については、織田コレクションは駅跡を主たる収蔵拠点としつつ、他の文化財は既存施設との役割分担を前提とするという整理としております。

11. 今後の検討 P23～28

○基本構想の位置づけ

本基本構想は、旧東川駅跡再開発の具体的な施設計画や配置を定めるものではなく、町全体のまちづくりの方向性と基本的な考え方を示すものです。

本構想では、旧東川駅跡の拠点としての位置づけ（文化／観光／日常）、「町全体がデザインミュージアム」という考え方の解釈と対象範囲、導入すべき機能の方向性を整理しています。

これらを踏まえ、基本計画において、施設規模・配置、事業手法（直営／指定管理等）、運営主体、交通・駐車場計画、財政スキームなどを具体化します。また、本構想で示す施設規模や事業費は、検討を進めるための前提条件として試算したものであり、今後の検討に応じで見直しを行うことを前提としています。

○事業費・財源の考え方

旧東川駅跡再開発における事業費および運営費は、現時点の条件や想定に基づくケーススタディとして試算したものであり、今後の基本計画や設計の進展に応じて変動する可能性があります。

現時点では、概算事業費を約 45 億円と試算しています。財源については、地域未来投資促進関連の交付金等（約 20 億円）、地方債、一般財源などを組み合わせることにより、総事業費の約 6 割以上を国庫補助や地方交付税で確保することを想定しています。また、実質的な町負担額約 14.6 億円については、ふるさと納税の活用など、多様な財源の確保を検討します。

さらに、基本計画では、機能や整備内容を精査しながら、事業費を約 40 億円規模へ最適化することを前提に検討を進めます。

年間運営費については、延床面積約 4,000 m²を前提として、約 1.1 億円程度を見込んでい

ます。

なお、本施設は施設単体の収益性のみで評価するものではなく、交流人口の創出、地域内経済循環の促進、関係人口の拡大など、地域全体への波及効果を含めて評価する事業として位置づけます。

○運営体制の考え方

事業運営については、町の現状や本事業の目的を踏まえ、行政が主体となりつつも、民間事業者や地域住民との連携を基本とした持続可能な運営体制を構築します。

その手法については、まちづくり会社の設立や運営への参画なども含め、多様な主体が役割を分担する運営モデルについて、基本計画において検討を進めます。

○地域との対話・合意形成

本プロジェクトの検討にあたっては、対象地周辺、とりわけ東町2丁目の皆様の生活環境への配慮を最重要事項の一つとして位置づけます。

基本計画及び設計段階では、歩行者・車両動線、交通への影響、騒音、景観、既存生活機能の維持などについて十分な検討を行うとともに、地域住民への説明や対話の機会を継続的に設け、その意見を丁寧に反映しながら、生活環境との調和を最優先に事業を進めます。